

## JS だより

連載 184

## 大規模災害と人の力

理事 (研修・国際及び東日本担当)

畑 恵介



## 1 はじめに

平成元年11月に日本下水道事業団の理事に就任しました畑恵介です。神戸で生まれ、神戸で育ち、神戸市役所勤務と神戸から離れたことのない人生を歩んできましたが、ご縁があって下水道事業団にお世話になることとなりました。

事業団に参りまして、最初の出張が、宮城県石巻市の震災復興事業の現場です。石巻市は東日本大震災での大津波によって大きな被害を受けました。また、地震による地殻変動で市街地での地盤沈下が発生し、それによって雨水排水が滞り、たびたび浸水被害が発生するようになりました。

このため、石巻市では下水道事業で雨水幹線と雨水ポンプ場などの内水排除施設の整備を行っています。新たに整備するポンプ場の数は11カ所、その排水能力は合わせて毎秒約87m<sup>3</sup>にも上る規模のもので、これらの浸水対策事業は石巻市をあげての一大事業となっています。

石巻市の次に出張したのが、長野県下の災害復旧の現場です。令和元年10月の台風19号での豪雨により、千曲川やその支流が氾濫して水没した2カ所の下水処理場を視察しました。それらの下水処理場では、流入する下水を何とか排除できていましたが、通常の処理機能が完全に停止しており、懸命に応急復旧作業が進められていました。機械・電気設備を中心に甚大な被害を受けており、被災から1年半が経過した現在も災害復旧事業が継続しています。

神戸市役所では、もっぱら下水道事業を担当し、平成7年の阪神・淡路大震災以降は、その災害復

旧と震災復興事業、平成16年に発生した三宮地区での大規模な高潮浸水被害に対する内水排除施設の整備、さらに東日本大震災をはじめとする大規模災害の支援など、様々な災害対応に明け暮れる毎日であったように思います。

石巻市と長野県の現場を見ながら、「私は災害とは縁が切れない、そんな人生だな」としみじみと思いました。

## 2 阪神・淡路大震災の教訓

阪神・淡路大震災が発生した当時は、私は処理場やポンプ場を所管する施設課で、処理技術を担当する係長でした。神戸市で最も大きな被害を受けた東灘処理場の災害復旧を設計係長が指揮し、それ以外の処理場、ポンプ場の災害復旧を私が指揮することとなりました。

当時、下水道局が入っていた市役所2号館が被災して使用できない状態でしたので、復旧の拠点を確保することと復旧に向けた体制を構築することから始めました。復旧の拠点は、東灘処理場の次に被害が大きかった西部処理場の会議室とし、比較的被害が軽微であった地区を担当する事務所から人を派遣してもらって体制を構築しました。

次の仕事は、担当者が働きやすい環境を整備することとコンサルタントや応急復旧工事をお願いする業者の手配です。

本庁舎で配布される食糧を手に入れて自転車で現場に届けました。断水していない北区の事務所から飲料水を運搬してもらいました。

そして、被災状況調査や災害復旧の設計を担当

するコンサルタントの手配では、神戸市の下水処理場を熟知しており、信頼関係が構築できている会社に応援を依頼しました。彼らも神戸市から要請があるのを待っていてくれた様子で、二つ返事で了解していただきました。そして、大阪に事務所を有するコンサルタントでしたので、仕事の効率化を考慮して、西部処理場の会議室に災害復旧支援の分室を組織して業務にあたるという提案までいただきました。

また、処理場の設計業務を担当しているコンサルタントだけでは人手が足りず、管路施設の設計を担当しているコンサルタントにも応援要請を行ないました。管路施設も広範囲で被災しており、神戸市内のコンサルタントは手いっぱいでしたので、かつて管路の設計業務を担当していた時にお世話になった大手のコンサルタントにお願いし快諾をいただきました。

応急復旧工事においては、機械設備や電気設備は、日頃からのメンテナンスなどの繋がりもあり、震災後、直ちに設備業者が駆けつけて工事にとりかかっていたのですが、土木・建築工事は少し様子が異なります。土木・建築工事が手つかずの被災施設に関しては、かねてより下水道のシールド工事や山岳トンネル工事でのお付き合いが深かった業者さんに、応急復旧工事を依頼しました。電話をかけると「いつ、畑さんから連絡がくるのだろうと、待っていました」との返事をいただき、体制を確保することができました。

私が担当者であった時代から、設計思想や工事の施工方法について、時には深夜まで議論したメンバーが集結して、災害復旧業務を遂行しました。

当時は、一つの課にパソコンが1台あるかどうかという、まだまだアナログの時代でした。コンプライアンスの確保も重要ですが、この時にはしみじみと「人の力」の有難さを痛感しました。

### 3 新型コロナという災害

現在は新型コロナというかつて経験したことのない災害に直面しています。

事業団の理事に就任して、数ヶ月は課題を抱え

ている現場を中心として、多くの現場に足を運びました。そして、現地の方と知り合い、信頼関係を構築することができました。

しかし、昨年の3月ごろからは、新型コロナの影響で出張する機会も随分と少なくなりました。WEB会議など、代替手段を利用してコンタクトしていますが、初対面の方は直にお会いすることと比べれば、どうしても信頼関係の構築が希薄となりがちです。

デジタル化がますます進んでいく社会においても、かつてのような人間関係をいかに構築していくかは、今後の課題であると考えます。

### 4 BE KOBE

大震災から20年が経過した平成27年1月には、神戸市は「BE KOBE」というロゴを打ち出しました。直訳すれば「神戸らしく」とか「神戸であれ」という意味ですが、サブタイトルは「神戸は人の中にある。神戸の魅力は、山より、海より、人でした」とし、「人はどれほどの困難に出会っても、それでも前を向き、心を合わせて生きていく大きな力を持っている。そのことを教えてくれた20年を私たちは大切にしたいと思います」と神戸が得た教訓を全国に発信しました。

逆境においても歯を食いしばり戦う人々の姿、新たな危機に向けた英知の結集、そして人と人が互いに助け合う心、これこそが阪神・淡路大震災で得た最大の教訓でした。

この教訓を大切にして、大規模災害にも、新型コロナにも立ち向かいたいと思います。

はた・けいすけ 昭和31年生まれ。同55年3月神戸大学大学院工学研究科修了、同年4月神戸市下水道局勤務。平成16年4月下水道河川部計画課長、同21年4月建設局東部建設事務所長、同23年4月同下水道河川部長、同27年4月下水道担当局長、同28年4月神戸すまいまちづくり公社国際支援室長、同29年4月道路管理センター神戸支部長、令和元年11月より現職。